

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34

JAPAN

Tamia

西游記

伊地知文庫  
文庫20  
422



前記行出太閤記第十卷

元文六年二月中旬丹波之五老叟教齡

七十二

鷹齋道之記

伊地知氏書冊

今茲天正十五三月の初博達致下九州大交鴻溝や  
こうの鉢橋とてゆるさきよのあゆ進發こまく  
自ら市歸に至る乞食陣之上家との人道を一  
考むれば奉の事ゆゑもろわいとてあつらひ山庫  
の道といふよ在國もてねうやう心地で月十  
九日におとし無形取下て口一ト木口回もと出で  
て日、文集よそもつた二日行之城庄食はれて  
ゆるべ出川旅ゆゑをかくすありあてぬ晴間

井子の桜門としにて船一隻を  
く坐て廻る。すゑは筆致にて音とは  
晴風を送るもあつて此處を是山近  
はま

必のたしのいありよ

ともあらむ行

軍書に欲必則莫令尙軍吉山とあまなむ  
よれをかへて添云下づ辰付とうに生  
船にて今日乃書がみ但馬因幡のほど若く

とおゆか舟を走る旅宿にはて上り  
下りうきやうきり船へひらて

主従とたかめあきの里を

旅するあるしづれ宿

至、日向者國、うゆまわと到て此處に

保く用よよらぬあゆうむねくはまく  
さりよみのとてまく船とく

かずるじよのとくめなきの

きしてくわくわくの

か事に口をきくが、あ、とてうちれりひととおは

今おありともうな

あくしめもよし乳とのてあまほの

やくろけうやくもヨトラシ人

九二日雨風あきなよよもわ生ぬ罪るまよ

一と船人下竹林、山にいづにくわゆる

とくねとく良間とまちゆ、ゆく海原で

梓宿宿ふあのるあよそだら行道て往三

里そしゆく木一にて山のきくとよひさう

奴社主とくゆくとく神人とくゆくとく祭りに  
お祓もん仕度の大祓多御神いとくいとくの  
そとぎ(け)る小寺(お寺)の小口(こぐち)をぬ  
ごくかき(あく)んをのぞむとくとくとくとく  
まう思

千早指神乃御神也天地と

わらうめつる國のみく(みく)と

八、日依附とゆく秋津とおよて湖水の小舟  
よもく平田までりよよま舟(ふね)を

のとて、

改まうへんてやあ、千言

さんもくを夏とけしるえは

すじて、言が居て、うつて、おはる  
すうどくのまはる、あらわして、あうて  
ひよみあはれ、神官千家、ゆき、國に  
あらわる、あらわして、後藤而て、  
いて、椎乃、あらわす、たる飯をくい、  
まく長する、まゆ、天劍葛西、まくつる

まうて對面、まよ太鼓、川人、まく、  
く向道、まく一轍、まく、あまなに、とて、作  
き、五國造、まく、はくる、青松、まく、はて、造  
うき、けり、詫、苗被の役者、まく、役立、まく  
礼麻、まく、里、まく、御事、なり、それから、羽、まく  
けめう、まく、まく、まく、まく、まく、のれを  
ふうせれ、まく、まく、まく、まく、まく、

うそ、まく、まく、まく、まく、まく、

速干素盞鳴尊到出雲國初有二十一字詠と  
あまとて／＼身の教とあまうけとゆのとてすと  
おもへけりよあ司らしハ一方いとあまのい  
けふほるきにゆと書いてあけよあはせを  
ち後々不毛をもれ、

和名御詠りいのりよつ

やし書すきにゆあまくせせをうるさむ  
よて速歌も一考方少てハ韵真ひよー  
とく船よまやま進すて考のあらじ

玉手難がよ／＼シロセアヒニアのあ／＼はまう  
かくよあきけは／＼人の心と金アトテ思るや  
うひめ言は／＼ととまのあふけまと  
郭云あきアリモアハれ波  
十九日アラノ不／＼とまよあつてゆあ／＼に  
向と云葉も／＼石見の海あ／＼きと云古事記  
「か」と白浪の山の巖うこちだあら  
とまれじと云

五種アラレ世とゆあれむち

うるのアホミヤ風  
せきよりやうて銀山(シロヤマ)  
城主のよみとく

珠のたまひとくらゆくまよめりも  
うるまゆるとてまづよ  
やまけみゆき寺を元つ下もと庭あづむの  
深山木の中よ夏とてわいかえて  
温泉はままで生い宿信院ゆきけに年  
連歌く一巻をせざれ本をかきこむはおどりよ

育月之日教句不竟小  
一朝而韵之清和

長の事にさへあけはまじふ  
五日ぬれすくはるも一れ張りたまふよ  
不意をなげてくわ、せきゆ

見草の水をくわしむれ  
七日濱風と生じよる扇とふらうとあら  
石見うだのねのあらより  
アマモテ さかの日と今てめぐらす  
アマモテ

辛丑年正月

うう行せと魚ぬとくつもせぬ  
えをきのれども

こへて長門國よち波の上原と又食  
てしょからぬと云ふとさり浪をせの事ぢる  
事と云ふゆく

みる人のむらむつきのやまと  
せきかづくまれば良也つた  
うちき國浦小細と云はばよ唐松乃とす  
と船人のらよひつけばいふもあく宣

舟底よきよくゆくめ  
我も向こづきておもひ  
りゆくねよくにまつり  
あこのく波のきよくゆくけき  
小波よくよくやあくじん  
つをだつてあこのく波  
古瀬ア波と云ふとお聲よゆくよく波  
よおとをうゆるもく石奥だまふと  
よもだらうとよどもくもれよくばれ

之を食ふとさて山のへ城入り大町  
よひにとてはまくとすりあらへ  
にて居たるけるもすゆうけにながめかく  
て草木とまを留めて海のたれとぬをぬと  
モ、うやせらのまくるとくとくおねを  
寝て死んでおきて食ひとどりうきうちら  
して、おれのあけつけの金波とお金波  
とく波のうたは、まじうをせばねの生います  
わがおとおとあらけ、からむ、國の後、いづき

よりと食く馬がかり出で十日せとて見と見  
不寧寺大に義隆をぐくせが下と身一往よ高  
てえーうねり深山ととけて日向が事  
云よみぬと住持と薦めまくわおひこの  
物理ととくほのとくめり出でひとく  
ゆくうちもれ爰てあまとくとく  
ほのじくらよかれてこそし  
は法無形通貫すとゆふべと馬をすまつて  
立たゞて

たゞいとまをすく年いしゆふと懶のどり  
よめらとくわくわとけにまゆいきて  
いざるとしとてゆうて

やへまわづのまえ  
馬まじと人のゆん  
豊浦宮とくらとく

水もぬ地のちうのぬうことを  
こよなれえもほんふとまし

因縁よゑの山むちに年約ふぞのひ

に寺よ寺の人内裏ともんぢうひらち便よ東  
ひーてお傳天皇とせえ、お平家と傳も  
そろりければ傳者今之の經冊をとアセキヨ  
かう人のうともあーほ

ましは草かくたびととぬま  
ましのゆのゆの波代きうちよ

玉あ西門司之間あ

玉よりぶらくでせん一をくわ

みくわねらんもの寫守

六歳か七歳といふとアリケルが、此處、あれ

萬能寺國よりモテム

あけくもほんのまほ

豈や柳浦をとて夜をさせよ

支國を山から見る事

四月九日未明と出しきる雨の殘り度

風のあきらかに少念はまつて物もあせりて

あまたて旅の宿とけり小舟の先見

金うちあらす者鐘と水の船のせきうち

かでれかうて今よとち日和のよし、鶴豆  
もとアシのゆきとゆむ、勅撰名寧よ、金と手す  
と萬うとえつけ、猪めくとがく、なたうと  
にわけて、おもむかし、わざとされまつと  
少佐、諭ぐるのと田でああ

書わるものとの脚とぞ

ヨリは止まつての後

かずはまくとせりかと、夕飯ありとひづくや

ノ、土賣のゆきとて金剛山のまゝいよ

春日麻鳴山はおもにちじの寺なりとて名を

ニリ山也してやまとよさの山也

寺のちいさつへたりナキは

縁起あらず生アセタリ次第

波あらば千の波のうるみのゆゑはは常の波

うけの又常椎の寺也よ山よりはくとちうり

ちあくとえア有けり小砂の毛と二重ハジモ

海れゆとく寫リはき十五間をもす

とくとく文珠がとせたゞを、鷺立の事が如く

ゆくまに堂本安喜は良也とて寺は堂后う  
國退はて内がえもむかし兵部卿が櫛をみてゆのま  
三セイ神也とくわゆて

名前もかの御も宮也のゆきて  
波とくけいじとく道

けぬ者とくも仰て支那胡もそのれとく爲  
まもくちてスル本原もくはく、備え少當よて  
主て戒定惠の三摩の箭どじかざしままでてふよ  
すのひそ石あるとすもて

されどよおとをかくるにあつて

むしも代をすすりあはせ

日をうへぬまわぬまほりに室と袖

の添と里人のそーぞれも

いづれともにぬさんと衣

神のみがれなみのまづに

日もそれぬじ船よせて神りしん

いきのよ袖ちら添を

廿六日寧波を天神とゆく所と少及トキ

鳥と魚あらけは富寺、七と八とありは安  
上一とひきりるちうめぬめて鷹派のふくらひのふ  
かくさくへるにちとうかよのちうへるの山  
えむるや右のすへ町からもとよりとみて御書  
まと宮に西都とも云ひて是を移梅と古本を號  
きうけにあらえのまかてととて

道乃のびはいとこくとを毒乃

うこはいってのくまより

アホ深川と重よりうてふりゆる、此一よ

うもくするふじのあやに宿すだつともうり  
お乃波じーよか(き深川)ア

うよたうよ、からくそつうえ

黒川

くく秋乃葉アモ(黒川)

シヤンスモウムキタハカツテの葉の波と  
ト行ふと波陣夜の波キカ(カ)ナリ本ミ  
一とほぐ草

たつ)歌あはれ(このゆと陣づら

お根あでロドアオクセレ

緑よ雨と山のくそ葉(モモ)アモウタの夜よま  
山とをもまきお巣(山室)事とと山伏のいる  
には育(モモ)の年(モモ)うちとて有城柳(モモ)り  
てく(モモ)の年(モモ)出(モモ)あ(モモ)ち(モモ)とて全(モモ)波(モモ)あ(モモ)  
サ(モモ)あけよ(モモ)山伏のゆ(モモ)と(モモ)く(モモ)波(モモ)あ(モモ)

青(モモ)か(モモ)ア(モモ)キ(モモ)

立(モモ)く(モモ)と(モモ)の(モモ)立(モモ)

小(モモ)こ(モモ)と(モモ)の(モモ)立(モモ)

丁也山にて

三月を以て乃山とよ入鹿と  
秋より春よりまことに

姪濱より今安吉腰痛とニセて目利金をも  
経りぬくと成テニシテ又あとの事事  
ウタアラばととやすより  
るうこつしきめいのとまられ  
たる姫濱と義よづらむちを禁ス余まづ  
す一トアガハシキとよもよおどりん

といへりあくとまつまつとも

姪濱より今安吉腰痛セリ 車船の腰痛と  
云ふと奥書である

えもんはなづくま乃ぞ此の  
わとのやうと書きくらる

六月三日姫濱腰痛セリ持耳峯玄祐和高柳漢  
與りまことにて教うて不思とくと云はば不思議  
の心地とひきかれてさうりと身をとまぢて  
入籠下す

風のほる南とすのアハラ

社同六月梅

日向利休居士國白駿渡舟船ひそテ波打  
お宿ノ後宮は雨のさわらを喜び、驚の心  
祚代ゆもえほ涼しきの風  
さくら御こととす夏の波打内  
じのうちもいりやの雨晴く  
是れ  
初夏  
翁の、晴のも國白駿が、不よみて君モセ  
まうせよとおは意とぬせよけりふ

ほしにといひ、いかよよとくの  
ものとてもとてもとての及  
國白駿翁の波打すゆきよきて君モセ  
せよけりおはせよとくの事とてくにゆくは  
て御出せよ

立山の袖ちづんちの父孫  
やくくはのくねをかく  
言をてかくせよとくは余は残田ふく  
いはくまつてよあまは

ねくらむとゆがへきものあうどく

すましゆるつみかのまち

宵古やまのまよ春稚の浦アメシテ

まくわせはれくにの風の

春稚のわづはる毛

ゆくよ船とくもじはなとくもできはる

からじて

いりてきくいおりばひとわく

まもあくらだらうかく

射馬音護家射川うはう一首送れて後後白

ふとよやかのすはいて苗吹き年年年年

まくわ通すがわらはばあして

めぐくわくわくわく

卒因和歌韻

始識達不情所鐘 向來相物對閑室

帝都門外莫言遠 千里回風一樹松

三波の川も山れ土不風

すこしきちかはえきの

五段

二と三の立てまつて、云ひて  
六月廿日一わてはくに海に大坂を下る。  
浪の音を絲風ちり、西を海  
あらわすかのするとよしよ  
川をたがり渡る。ま  
と十宗易すとせけるとよしよ  
向まくも、かるとてかくじら  
川を渡る。まきせるまくも

廿七日、船を出る。あさく、あさく、まとけ  
らむるには、轍を機や打殺して、後勾は  
まくとよあまく

麦草、刈てのありす被る。

十一月、西より吹きくる月

12

主の簾れしまとて、まと

有富國の裏開のなづけ庫、船を庫せ  
一かく、馬を引船、南の浦とゆく。さざ  
立めゆく、松風にひづり生む、  
てまく

近處へ向うて黒い火にけり

秋と、かくゆべの夜と、うね

六日はまよ船の事と、國語の事と、萬葉の事

と、わ鳥からきてあ木と葉をもとすやうに

と、秋と冬と春と夏と、晴るのれあつ

て、木と、木の袖

森と、かと族のちとし

八日市と、まほのうつて、國の天神と立正(き)國

さがしと、國の立正(き)國

三月と、月と、まつと、我と、近處へ

九日アリ

主と、月と、まつと、我と、近處へ

十四日と、國の天神(立正)と、まつと、我と、國の  
アリて、のまくと、めぐらす、まくと、の、儀常(い)  
樂坊(らくぼう)と、まつと、一面(いんめい)と、其(その)  
わの、の、よと、ゆきと、おと、おとと、白(しら)顔(おほ)けり  
内(うち)と、外(ほか)と、進(すす)み、天神(てんじん)と、まつと、國の、

又(また)と、まつと、我(われ)と、近處(ちかぢゆ)

因縁の事すまふ浦と、ふ御の事く掛かること  
この地りあそばれてゐる  
もうぬのうへて風を経て  
音鳴る事すまく山と、風よみとひよひよ  
えどもねでほよひきて、あらとよじよひよひよ  
山といひ乍りあ

おもむれ道引とくとくゆき  
名山もあくらへん

え年不嚴ゆちくめて、秋と冬に、春と夏に、海の面

二町もとおもへくて、まう廻廊を挂けが段  
かげられて、船も入る事

三歳もの下津のものとては

波れよより立つともうと  
波

は波と高と船と船守と、藍と青、うきく有り  
小波ゆき立つて、まうとく、船平と船同のうき  
はて、行二町計も、藍と青、うきく有り  
四月と五月と六月と七月と八月と九月と  
日と月と年と金と、うきく有り

新しいと月や月の光也

霄も相守連う眞也あらまふ日よを心  
つむれどもやまとて辞退けられ、後も  
もととて黒ひぬ郭の弓けき、

秋半もとまじ山にとあい

冬にゆづりけりて、波すすみあは  
いけよめれ者とて、至れく予見が痛ニ  
良也れされ床と脇枕と出でまゆ一室うち  
けりて、奥跡もとまよのまよのゆゆるま

とくらむに附るやうにまう二聲ひげりて、川  
音にとてかね御えまくとて、首を盃てせぎけ  
そのひととてやさしくして、あい

吾の心神あらへ四年と五年あわてて、弓  
とておおけめ船と出でてのまにあらゆき、  
うれし海後は、弓射すよ上り十、箭輪と  
うゆる、竹馬やうその弓をと亨り、みて  
涼すよあき、三月、一月して、弓をとて、弓房に

舟と歩き合ひと  
いふ事すまぢ  
が絶あり内へ  
りるえしと船  
を被りぬあらといふ  
よ聞のれど、彼等  
もあとはまよひ  
きよもはまよひ  
きのまわらひと

内不のアホとあらわす事多  
シヤまうゆのすゝとある

十九日海常の事  
市よりおまかせ申す  
門とおまかせ申す  
船とおまかせ申す  
生とおまかせ申す  
よといふ

あつまぢかの月とくらべて  
かよひなすとみまづ月よ

さよの月の事承りよまてせよまゆのせういは  
せきの身にてもあへらむとく

風の國をの浦を下す人全ももる  
伊豆旅夜一

مُؤْمِنٌ بِهِ مُؤْمِنٌ بِهِ

月と、しづかともいふことをする

とくとくは、後回があと、橋底の窓から、夜よを  
城をうきままで、近づかれて、鍋の音があわて  
せきて、おれは、なきもの。

さうとやへるもと  
九日の方と、待てぬと、出立たる。唐のうきよ

いはかりがよそいへばよせん  
我か一まと、思ひまつて

姫路と、三城と、おとこへて、りゆく、三歳のとき、ゆ

曲の向ふ、こうこうと、かくよびのけふ、海と、大雨ふ  
アホ、まくよきとま

水より、いくじあら、川

小う、海のいって、に、うち

すこいもなる、いはの、を、残傳して、ちがの、くみ  
みと、けくと、あは、と、あは、よ、く

まかは、尾よの、の、ね風

えきの、な、うは、は、よ、く

まようかの、と、まよ、た、の、う、と、お

おまえはよぬるのとておまえとておまえ  
くもくもあらわぬよもて  
りさの追風さりあへや  
これより月とぞむけて見る  
三まの浦ちるをとおとよせアシム  
れ月はゆきとけふ

おまえさまやの浦に音附て  
波打つとし有月の内  
入船と云はとおとよせあらわのあれも

おまえもむらかだきみが  
山やまととくとく風歌舞  
圓舞のうりて  
おまえの浦さみくわ葉  
あまのややくうるさん  
おまえはと波のあくよこの音附とお  
めう生田の森とおよつねとて  
おくみれえもあくを成まう  
おまえとくとく風

高麗には、とおゆう、たりと津のは、東の海  
とまくらて、南せ、二日とまよ羅波、り、とみに、  
がれりも、のも、とくらんく、とめくらんた  
けらかく、とくらんた  
なふとくらんた、いわく、きる  
かわく、もくらんたに、ま

此道之記、いぬ、一、美、可、も、あ、め、ま、と、も、も、  
けき、いぬ、も、シテ、も、か、て、る、一、符、早、



